コナン氏の落ち着かない食卓

暁　神夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コナン氏の落ち着かない食卓

【Ｎコード】
Ｎ５４６９Ｃ

【作者名】
暁　神夜

【あらすじ】
小五郎行きつけの雀荘から全てが始まる。紆余曲折の末にコナンがたどり着いた驚愕の事実とは如何なるものなのか――※この作品はリレー小説です。作者によって微妙に描写が変わる可能性を御了承下さい＾＾

◇　一卓　東・南・西・北・白・發・中はお好き？（前書き）

ようこそいらっしゃいました＾＾　あらすじに書いてあるように、この作品はリレー方式を取り入れさせて頂きます＾＾

一話毎に担当作者が変わります。第一話を飾るのは私《暁》です。次回を担当致しますは《神夜》　二人併せて《暁　神夜》です！以後お見知り置きを～＾＾

さて、本編に入られる前に触れて於きたい事が何点か……。この作品は原作をトレースした物ではなく、別枠のエンターテイメントを目指しています。そして、私達それぞれの作文力を試させて頂く為の作品でもあります。

故に、批評・指摘を随時お願いしたい次第です＾＾

気になった事があれば何なりと仰ってくださいまし！　それを糧として更に精進して参ります！

なんて固い事を申しましたが、何の気無しに読んで戴き、楽しんで下されば幸いです＾＾

ではでは、どなたも先にお進みくださいませｍ（　）ｍ

◇　一卓　東・南・西・北・白・發・中はお好き？

「ちっきしょぉぉぉ――――！　また振り込んじまったァァ――――！」

「フン、あんたもヤキが回ったようだなぁ。眠りの小五郎ともあろう者が…」

「え？　オタク、私の事を知ってるんですか？　嬉しいなぁ！」

いきなり背後から声を掛けた銀髪の男に、小五郎は警戒心のかけらもなく喜びを満面の笑みで表した。卓を囲む仲間に簡単に紹介され、興味深げに相槌を打つ。

「この人はなぁ小五郎ちゃん。ジンさんといって、何とかって巨大組織の幹部様なんだぜ？」

「へええ！　この若さでかァ？　世の中、上には上が居るもんなんだなァ」

しみじみと頷いてその出で立ちを見遣り、小五郎は卑しい事を考えた。巨大組織の幹部であれば、悩み事や心配事の類が一つぐらいはあるのではないかと。

しかし、明け透けにねだる訳にはいかず、小五郎はそれとなく話題を振ってみる事にした。

「ああ、丁度誰かに頼もうとしていたんだが、眠りの小五郎さんなら心配要らねえだろう」

快諾を貰えた小五郎は内心ほくそ笑んだ。おくびにも顔には出さなかったが、心の中では盛大なパレードが繰り広げられていて、もし読心術なるものがあれば真っ先にそれを亡き物にしたい気分だった。

「そ、そりゃぁ一体どんな悩みで？　宜しければ、この不肖毛利小五郎が解決してご覧にいれましょう」

「ほう、それは頼もしい！　では早速、と言いたい処だが、二人キリで話を進めてー」

含みのあるその話し方に、小五郎は少し警戒心を抱いた。経験上《二人キリで》と切り出された時に限ってろくな目に遭った試しが無かったからだ。

しかしながら無下に逃げる事も躊躇われた。

「判りました！　依頼人の不利益になるような行為は避けなきゃいけねえ。詳しい話は後程って事にしましょうや」

「そうして貰えると、色々と助かる。しかし、一度話してしまうと後戻りは出来ねえが――」

明らかに危険な匂いが言葉の端々から読み取れて、小五郎は急に不安になり断ろうかと考えた。しかし、どこから情報が漏れるか分からず、もし蘭の耳に入ったらと考えただけでも嫌な汗が滲んでくる。

本気で怒った蘭の相手をするぐらいなら幾らかはマシなのかも、と生唾を飲み込む。

「い、良いでしょう。ど――――んな悩み事でも私の手に掛かればホホイのホイってね！　ドロブネに乗ったつもりでドドド――ンと任せて下さい」

「おいおい、小五郎ちゃん！　ドロブネはまずいよ。それを言うなら大舟だろ？」

からかう笑い声を聞いた小五郎が顔を赤くして煙草をくわえる。クーラーの風に掻き消される紫色の煙が、何故だか行く先を暗示しているような気がしてそっと瞼を閉じた。

そんな小五郎の考えを見透かすように、ジンがおもむろに立ち上がった。

「あのう、今から何処へ――？　もう少し打ってからにしましょうよ。ほら、何というのかァァ、まだ心の準備が…」

急に尻込みをする小五郎の態度に、ジンが目を細める。それが自分を睨み付けているのだとは気付かずに、小五郎は同じように目を

細めた。

「おもしれー。その勇気に免じて、コイツを使うのだけは止してやるよ。全く運の良い野郎だな」

話の筋が読めない小五郎は、壊れたカメラのシャッターよろしく、ぱちくりと何回も瞬きしていたが、ジンの懐に鈍く光る物を見つけて身動きが出来なくなった。

ヤバい空気がぷんぷん漂い、小五郎の目の前が真っ暗に霞む。辛うじて椅子からずり落ちなかった分だけ、小五郎にとっては幸運だったかも知れない。

「もうあんたは逃げられねーよ。出会った事を呪うんだな」

「それは、どういう意味だァ？　まさかジンさん、あんた初めから俺の事を知ってて？」

「だったらどうする。そのちょび髭の生えた間抜けヅラを、死に顔に変えるか？」

この世の全てを凍り付かせるような冷たい目で睨まれた小五郎は、返す言葉を飲み込んだ。爪先から頭のてっぺんまでの組織細胞が、全力で小五郎から逃亡を図ろうとした。

「冗談が通じねーらしいな。俺はただ、あんたに人探しを頼みたい

だけだ」

「だ、誰を…？　もしかして、生き別れになった恋人…とか」

「…まあそんなもんだ。奴がそう思っているかは分からねえがな」

遠い目をして思いを巡らすジンを見て、小五郎は少しだけ緊迫感を解き放った。一時は命の危険に曝されたにしては、甚だ楽観し過ぎている事に気付きもしないで。

まあ大丈夫だろう、と高を括った小五郎はジンを事務所に招き入れた。妙な約束事を交わす羽目にはなったが、特に支障の出るもので無かった為、二つ返事で請け負ってしまう有様だった。

そして急ごしらえの麻雀卓をジンと囲い始めて調子づいてきた頃、階下からコナンと蘭の談笑が聞こえてきた。

最悪の再会が訪れる――

◇　一卓　東・南・西・北・白・發・中はお好き？（後書き）

前々から興味のあったリレー小説ですが、始めてみてその難しさを痛感しています＾＾；　作者間の表現方法の違いであったり、用いる語句が全く違ったりと…まだまだ課題がテンコ盛りです＾＾；

しか～し！　例えばお互いの欠点（？）を相互的に見渡せたり、一つの作品を生み出す連帯感を覚えたりと、良い事づくめですよ？　他の作者様方も、コラボしてみては如何でしょう＾＾　一人では見えないものが、二人でなら見えるようになるかもです＾＾

特に推奨は致しませんが、結構楽しいものですから＾＾

なんて、まるでノロケているようなのでこの辺で……。

次回、神夜先生の作品をお楽しみくださいませ＾＾

◆　二卓　一寸先は地獄絵巻

「おっちゃんただいまぁ――」

「ただいまお父さん。大変だったんだよ！　途中で電車が止まっちゃってさぁ！」

扉の向こうから現れた蘭とコナンは、テーブルを隔てて向かい合う二人の男を見てそれぞれ驚いた。その口からふかされる、灰白い煙が少し強まった。

「もう！　こんな早い時間から麻雀なんかやって。どーせ負けてすっからかんになっちゃうくせに！」

お土産の入った荷物を下ろし、腰に手を置いた蘭は麻雀台と化したテーブルを睨んだ。

薄闇の中、目につくものは三つ。山のように積もった吸い殻と、ネクタイをはちまき代わりに巻いている小五郎と、そして小五郎と向かい合う長い銀髪の男。墨色の服と絹のようなこしがある銀の髪が、嫌味なほど似合っていた。

蘭と視線の方向が合ったコナンは、愕然としたまま全く動けないでいた。

「こら、蘭っ！　何最初から俺が負けるような言い方していやがるんだ！　今日はかつ、勝つ、ぜえぇったあいにかぁぁぁ――――つ

ううっ！　ほらほら、神聖な勝負の邪魔だ。とっとと上がってろ！」

「やる気だけは超一流だね。ところで？」

佇む二人を手で払いのける小五郎の高慢な態度に蘭は、あからさまに不機嫌な表情をする。

いつものことだ、仕方がないなと嘆息を出した蘭は、興味の対象へ目線を走らせた。

「それよりお父さん、そちらの方はお友達？　いつも見かけるような人と、随分タイプが違うから」

見開いた目を丸くする蘭に目配せをされた小五郎は、『ああ、この人か？』と俯いたままの男を指し示した。

触れて欲しくない話題が上がり、コナンは身体の全細胞が麻痺したのを感じた。

「業界のツテで知り合いになったジンさんだよ。俺の麻雀の師でもある。俺が勝ったら、依頼を回してくれるってゆーから今奮闘中ってわけ」

こちらを見ないまま軽く会釈をするジンを眺め、更に興味が湧いた蘭は引き寄せられていく。もっと近くに寄って顔が見たいと思ったらしい。

コナンは止めようと手を差し延べようとしたが、身体が固まった

まま動けない。

「ふーん？　でも、あんまり人に頼っちゃダメだよ？　ジンさん？　ていたらくで根性なしの父ですが、どうか仲良くしてやって下さい」

「妙な紹介すんじゃねぇ！　俺が本当にていたらくで根性なしだと、ジンさんが思っちまうじゃねーか！」

本当のことじゃねーかよ、とコナンは胸の内で小さく呟いた。

そして深く迷う。小五郎が、どういうツテでジンと知り合いになったのかは知らないが、あの、全世界を凍らせるような冷たい瞳をした男と係わり合うのは危険すぎる。間違いなく、万物の頂点に立つ危険さだ。

だが、切り出す言葉が見つからない。毛一本までが警鐘を鳴らす。ただこの場を離れたい、と逃げ腰になる自分が情けなかった。

「分かったわよ。お父さんの好きなようにして。ところで、二人ともご飯まだだよね？」

「もっちろん。腹ペコのペコりんちゃんよ。空腹感を紛らわすために、煙草の本数が増えちまって困ってたところさ」

「煙草の本数が増えたって言っても、いつもそのくらいじゃない。私のせいみたいな言い方するのやめてよ」

語調を強めて主張する小五郎は、くわえた煙草の先端に手を伸ばして面倒臭そうに火をつける。
少しでも長く見せようとかっこつけて組み替える寸胴な足を、蘭は冷ややかな目で一瞥した。

「分かったよ。今すぐ用意するから。よかったらジンさんも一緒にどうですか？」

蘭の劇的な誘いに、コナンは吐きかけた息を飲み込んだ。バランスを崩した身体が後ろにのけ反り、足を大きく一歩引いた。立っていられるだけでも奇跡だと思っている自分の身体に、よく動けたものだと拍手を送る。

「そうだな！　一人でも多い方が賑やかってもんだ」

くわえた煙草を噛み、小五郎は両手を軽く叩いた。死にかけた金魚のように、口をぱくぱくと動かすことしかできないコナンは、大きな目眩がして壁にもたれた。そして視界もぶれていく。

「どうだジンさん？　蘭の料理はそこそこいけるし、夜は長い。休憩がてらに、飯でも一緒に食べるとしようじゃねーか！」

「……そうだな。最近ろくな物食べちゃいねーし、娘さんの好意に甘えるとするか」

抑揚のない冷めた調子で、ジンが固く返す。冴えなかった蘭の青灰色の瞳が、一気に煌めいた。

「じゃあ決まりだね！　早速用意するから、出来たらすぐに呼びにくるね！　行こうコナン君！」

「え？　ちょっと蘭ねえちゃん？」

声を弾ませた蘭は、コナンの手を引っ張りすぐさま階段を駆け上がっていった。

混乱で一寸先も見えない状態のコナンは、ただ蘭に従うしかなかった。

こうして、地獄の晩餐会がコナンの意志を無視して決定された。

◆　二卓　一寸先は地獄絵巻（後書き）

こんにちは^^　後攻の神夜です。今回、初の試みだったんですが、正直楽しいです。書いている本人が全く先が読めないスリル感。協力してくださった暁先生に、感謝感激雨あられです>＜

先攻の暁先生から原稿をいただき、まず吹きました！　『ジ、ジンと小五郎が麻雀仲間ァ？　絶対にありえね～！』と。

まず、自分では考えつかないネタです。そして毛利一家＋コナンと団らんのひとときを過ごすジン！？　想像しただけでも恐ろしい……。

では、暁先生！　第3話よろしくお願いしま～す！

◇　三卓　ジン、あんたは強かった…

「業界のツテで知り合ったって事は、ジンさんも探偵やってるんですか？」

興味本位から出た蘭の一言が、コナンのいたいけな胸を絞りに掛かる。目を煌めかせる蘭とは対照的に、コナンの頭上には墨色の雲がドンヨリと立ち込めた。

「蘭ねえちゃん？　いきなりそんな事聞いたら、おじちゃんに失礼だよ？」

「え？　だって、お父さんみたいに難事件をバッサバッサと切り捨ててるんでしょ？　聞いてみたいじゃない」

何か言葉がヘンだろ？　と語彙的に突っ込みたい衝動を何とか抑えたコナンは、横目でジンの反応を観察した。厭味ったらしくおじちゃんと宣った以上、気になって食事どころではなかった。

すると疑問が浮かんだのか、ジンが固く結んだ口を開いた。

「ボウズ、お前の名前は何て言うんだ？　俺の事をおじちゃんと呼ぶのは構わねえが、出来れば名前で呼んで欲しいものだな」

相変わらずの抑揚の感じられない語調に秘められた冷たさが、痛いぐらいにビシビシ伝わってくる。

「ごめんなさい、ジンのおじちゃん！　で、ジンのおじちゃんは今までにどんな事件を起こして、あ…いや、解決してきたの？」

あからさまにおじちゃんを連呼されたジンのこめかみが小刻みに震える。コナンはつぶらな瞳でジンを見つめ、心の裏側でほくそ笑んだ。

《バァロ。いい加減化けの皮剥がせよ？　オメーがおっちゃんの師匠だァ？　んな事言って、ホントは蘭が目当てなんじゃねーのか？》

とは思っても表向きには純真な子供のコナン。中身は新一といえ、生まれ持ったいたずら心には勝てない。

「ねえ、ジンの――」

「もう！　おじちゃんおじちゃんて、そんなに言ったら、幾ら温和しいジンさんだって怒るわよ？」

「だぁって！　おじちゃんはおじちゃんでしょ？」

あくまでも深追いしようとするコナンを、蘭が身を乗り出して叱

り付けた。不平を漏らしながらもコナンの目線はジンへと走る。
ついさっきまでの死にそうな立ちくらみの事などは当に忘れ、こんな痺れるようなスリルを放っておけるかよ的なイヤラシイ光がジンを刺す。

「あん？　どうしたボウズ。俺の顔が珍しいのか？　それとも何処かで会ったか？」

ジンの細い目が畳み掛けるように襲ってくる。きゅっと絞まった瞳孔が爬虫類を思わせ、流石にコナンも身体を縮こませた。
ヤッベ、と感じた時には後の祭りで、ジンの手には黒光りするアイテムが握られていた。

「ななな――ジンさん？　そそそんな、ぶぶぶ物騒なモンはしまってくれよ！　頼む！　この通ぉぉぉりィィ――！」

呆気にとられて目を丸くした蘭が、恐る恐るジンの手元に目線を泳がせて小さくフフフ、と笑う。一人だけ分かった風な爛漫さに、壁に飛び付いていたコナンが引力バンザイずり落ちた。

「うっわあ、見て見て？　まるで本物みたいじゃない？」

「ば、蘭っ！　勝手に触ってんじゃねー！　暴発したら手がぶっ飛んじまうぞ！」

「こらっ！　コナン君？　呼び捨てにしたらダメだって、何回も言ってるでしょ？　ホントにもう、そんなトコばっかり新一にそっくりなんだから！」

場違いな怒られ方にコナンが仏頂面で唇を尖らせた。天然ボケも愛嬌の一つとはいえ、気付かないのは如何なものかと嘆きの長息を深く漏らした。

そしてそれを可笑しそうに肩を揺らして笑うジンと目が合った。

「物騒なモンてのはこれの事か、名探偵？　元刑事とは聞いていたが、ニセモンとホンモンの区別が付かねえとはな」

「へ？　ホンモンじゃねえの？　いやァ、道理で光沢が違うとォォ」

拭っても後を引く冷や汗を顔中から発散させる小五郎が、助かったと言いたげに黒濁した魂を浄化させる。ジンが冷ややかな目で一瞥して、シガレットケースから取り出した煙草に向けて引き金を引く。

カチリ、と鳴ったその先で青白い陽炎がゆらゆら揺れた。

「フホォォォ――ォィ」

何とも間の抜けた長息を漏らしながら、小五郎が四つん這いに崩れ落ちる。生まれたばかりの小動物さながらのていたらく振りには、掛ける言葉も浮かばない。

限界まで細まった蘭の冷たい眼差しに見据えられた小五郎が、ガックシと落としたかぶりをバネ人形のように弾ませた。
それを合図に、実に有意義なディナータイムが幕を閉じた。

「もう帰るんですか？　もう少しゆっくりして下さって構いませんけど、無理に引き止めても迷惑ですよね？」

ジンの帰りしなを蘭が名残惜しそうな顔で濁す。その意図を理解したくないコナンは崩れそうになる足元を必死に踏ん張った。
がしかし、ジンに痛恨の一撃を喰らった事で無情にも努力は報われなかった。

「また寄らせて貰うつもりだ」

この一言が、コナンの頭の中で地球崩壊を促した。

◇　三卓　ジン、あんたは強かった…（後書き）

さぁて、先ずは会心の一撃を放ったジンに軍配が挙がりました！
コナンの爆弾発言も大人なヤツには風の囁き？
そればかりか、意味ありげな蘭の動向が気になるところです（「▽ー）

全くの天然ボケとは言い難い！　大体、名残を惜しむ…って＞＜。
　なんざんしょ……
お父さんは泣いてるぞ～（オレもな…ｂｙコナン）

そんな訳で、今回は私《暁》がお相手を務めさせて頂きました＾＾

次回は《神夜》先生で～す＾＾　ヨロシク～（＾－＾）／

◆　四卓　暗魔の誘い

真黒の外套をふわりと羽織ったジンは、背を向けたまま軽く舌打ちをした。
白銀の流河を思わせる髪で邪魔をされ、ジンが何をしていたのか分からなかった。

「何か都合の悪いことでも？　ひょっとして、迎えの人が来てくれないんですか？」

どうやら携帯で話をしていたらしい。すらりとしたジンの背をを熱心に眺め、蘭は立ち上がった。ジンしか見えていないようだった。

「フッ……その通りさ。取引が長引いたらしい」

こちらを顧みないまま自慢の銀糸をさらりと翻すジンと、ジンの心を見透かすような発言をする蘭をコナンは交互に見た。玄関へ向かうジンを目で追いながら、視線を外そうとしない蘭へ動転したコナンは近寄る。

「蘭ねえちゃん、聞き流しちゃ駄目だよ？　取引なんてゆー言葉、探偵なら普通は使わないでしょ？」

「足がないんですよね？　ここらへんの地理に詳しいんですか？」

「いや。だがタクシーでも拾うつもりだ。心配はいらねえ」

重くて低い声を出すと共に、伸びたまま仰臥した小五郎の方へジンは指し示した。華奢な半身がこちらを向く。

「麻雀の勝負も持ち越しになっちまったし、別のことをして夜を過ごすつもりだ」

コナンはきつく歯噛みした。自分を無視して話を進めていく蘭に疑問を強く感じた。

ただの子供だと思っているジンは仕方ないとしても、蘭に関してはどうだ？　早く帰る恋人を引き止めるような言動と、溶けてしまいそうな熱い眼差しを送る態度が、どうしても納得がいかなかった。

「タクシーって……この辺はなかなか捕まりにくいんです。夜は特に」

「だから心配はいらん。初めて来たわけじゃねぇからな。ここは忘れもしねぇ思い出の場所だ」

更に低く響かせた声音が襲い、コナンの息が詰まる。

覚えと確信があった。土門氏殺害未遂の顛末がここ、毛利探偵事務所だったからだ。思い出しただけでも、研ぎ澄んだ悪寒が走る。

「ら、蘭ねえちゃん……」

ジンに興味を持つ蘭を食い止めようと、コナンは早速口走る。だが無駄だった。それに詳しい事情が話せない以上、それ以上の言葉は出せなかった。

「じゃあ、せめて大通りまででも見送らせて下さい。その方が早くタクシーを捕まえられますから」

言葉を返さないジンは、扉の前で完全に振り返った。そして何度も話しかけてくる蘭の身体を、上から下、下から上へと執拗に眺め回す。品定めをしているような鋭い目つきだった。

「どうしたんですか？　私に何かついています？」

「そ、そうだよ？　そーゆー風に値踏みしてくるような目付きをしてきて、蘭ねーちゃんに失礼なんじゃないの？」

「黙られちゃすごく不安になります！　そんなに変な格好していますか？」

不安な顔を突き出す蘭は、今着ているものを確認した。七分丈の紺色パンツに、レース仕様に仕立てられた薄茶のサマーニット。特に問題はないと頷く蘭に、ジンはふ、と無機的な調子で白い歯を覗

かせた。

「今すぐ着替えてこい」

「はい？」

唐突なジンの言葉に、向けられた蘭ではなくてコナンが答えた。引き攣るコナンの顔から、作り笑いすら消えた。

「それってどういう意味なんです？」

「男とデートするような格好に着替えてこいと言っているんだ。ガキっぽい服は駄目だ。この俺と釣り合いが取れる服装にしろ」

薄く嗤うジンは、親指を立て自分へ引き寄せる。誘い出す仕草を見せるジンに、蘭のズボンを握り締めるコナンは反発した。

「じ、じゃあ僕も行く！　僕も僕も！　行きたぁい僕も行きたあぁい！」

コナンは純情な子供の口ぶりを装った。

良い考えだと思った。引き止める言葉が見つからないのなら、ついていけばよいと。だが蘭は、ただ突っ立っているだけでコナンの言葉に反応しない。

「……フン。ガキっぽい服装が駄目だと言ってんのに、ガキなんか連れてくわけねぇじゃねーか」

「で、でも！」

底意地悪く鼻で嗤うジンが、コナンの相手をしたのはこれっきりだった。自然と足が進んでいく蘭に、コナンは茫然とした。

「ちょっと待ってて下さい！　すぐに着替えて来ますから！」

「決まりだな」

ジンの口角がきつく引き上がる。密やかな企みが、確かに含まれていた。

「外で待っている。俺は気が長ぇ方じゃねーから、いなかったら諦めるんだな」

「――わかりました！　急ぎますから！」

「あ……ちょっと蘭ねーちゃん？」

巧みな誘い文句に誘われて、まず蘭が消え、そして蘭を追うよう

にジンが扉の向こうへと消えて行った。残されたコナンは、口の端を引き攣らせその場へへたり込んだ。

◆　四卓　暗魔の誘い　（後書き）

こんにちは、駅前のシティ広場での祭りを素通りしてきました、神夜です＾＾　もう一年経ったのか……と感慨深かったです。

さて……ジンの誘いに乗った蘭。大人の魅惑（？　ジンの場合は悪魔の魅力でしょうか？）に興味があったんでしょうかね？
ジンは蘭をどこに連れて行くのか？　分かりません！　暁先生が決めることですから！
個人的には意外なところがいいですね☆　笑えるスポットとか＞＜

それでは暁先生、よろしくお願いしま～す！

◇　五卓　地獄の釜口が開く

コナンは、ジンが出て行った扉を強く睨み付け対策を練った。
けれど蘭がジンに向けた熱い眼差しが邪魔をして、考えを巡らせる事が出来ない。

「何でだよ、蘭。オメーが好きなのはオレの筈だろ？」

些か身勝手な愚痴を零し、靄の掛かった瞳を細めた。
走らせた目線の先にある片付けの終わっていない食卓を見ると、更に胸がざわつく。
普段は食事が終わると直ぐに配膳を畳む蘭が、そこまでジンに心を盗まれてしまったのかと。

「ったく、訳解んねー」

そう吐き捨てて仕方なく始めた片付けのさなか、コナンは未だ放心する小五郎に気付いた。
そして強く思う。もとはと言えば、このおっちゃんがジンさえ連れて来なければ、と。
逆恨みの念を抱いたコナンは一計を案じた。

「どうせ奴がまた来るってんなら、おっちゃんにも犠牲になっても

らうとすっか」

ともすれば自分の身も危うい。しかし後には引けないとも思った。ジンにひけを取らない悪魔顔で口端を吊らせたコナンは、迷わず英理に電話を掛けた。

「――そういう訳だから、よろしくね、おばちゃん？」

得意料理をねだられて嬉々とする英理との会話を終えて受話器を置くと、蘭が部屋から出てくる気配がした。

蘭の正装に興味が湧いたコナンは、薄く扉を開いて盗み見た。途端に疑いの目を向け、息を呑んだ。直ぐに視界がぶれてゆく。

「マジかよ、蘭。気合い入れ過ぎだろ」

背中が大きく空き、胸元も谷間がはっきりと見えるぐらいに露出されていた。

新一とのデートの時でさえパンツルックが主流の蘭が、そんな派手なカクテルドレスを纏う姿は初めて見た。

もう何が何だか解らなくなったコナンは、ただ茫然として階段を下りてゆく蘭の背中を見送った。

「お待たせしてすみません。どう、ですか？　少し気合い入れてみたんですけど」

階下から聞こえる声に、コナンは「入れ過ぎだろ！」と突っ込み、歯噛みした。
ジンと対面する蘭の顔が気になって仕方がないのに、怖くて覗けない。
立ち尽くす事しか出来ないコナンに、ジンの言葉が追い打ちをかける。

「似合うじゃねーか。それでこそ俺の隣に相応しい。今日は帰さないかも知れないが、構わねーだろ？」

そんな言葉を聞いて黙っていられるコナンではない。
「構うに決まってんだろ！」と、かぶりを大きく振って蘭の否定的な返事を待つコナンを、会心の一撃が捉らえた。

「…はい、判りました！　何処へでも着いていきます。その代わり、楽しませてくださいね？」

とどめを刺されたコナンは、視界が暗転してその場に崩れ落ちた。もう蘭たちの会話は耳に届く事もなかった。
二人が歩き出した事もあるが、そればかりではない。コナンの全細胞がそれを拒否したからだ。
この世の果てがやってきた感覚に、精も魂も尽きてしまった。

大通りに向かう二人には会話らしきものは無い。
ジンは固く口を閉ざし、蘭は熱病に魘(うなさ)れたような紅い顔で二歩後ろを着いてゆく。
魔道師が従者を従える風な怪訝さに、往来の目線が飛び交った。
そして十分程歩き、二人はタクシーを拾った。

「どちらまで？　正直、あんまり近場は困りますよ？」

歯に衣着せぬ横柄な運転手に、ジンが舌打ちして最高に凍てつく睨みを利かせた。震えあがる運転手に行き先を告げ、先を急がせる。

「今日は何処に連れてってもらえるんですか？　ジンさんの事だから、きっとお洒落なスポットですよね？」

蘭の煌めく瞳を感じたジンが、俄かに笑う。白い歯を誇示するかのように。
そんな様にさえ蘭は胸を躍らせた。重度の宗教信者を思わせる蘭の仕種に、ジンはほくそ笑んだ。

「なあに、別に取り立てて気取るような場所じゃねえさ。お前はただ堂々としてりゃ良い。全ては俺達の意のままだからな」

「え？　それってもしかして、ＶＩＰ扱いって事ですか？　やっぱりジンさんて、すごい人なんですね？　うちのお父さんと違って」

「まあ、何もそこまで言う事はないだろう。今頃くしゃみでもしてるんじゃねーか？」

冗談混じりについた言葉にも深く感動する。言ってみればそれだけ重症だと取れる。

ジンの言葉を神の声のように感じ、蘭は熱く見返した。

そうこうしているうちに、タクシーが目的地の手前で停車した。料金を催促する運転手を薙ぎ払い、ジンは何食わぬ顔で歩いてゆく。

呆気に取られつつも後を追って、蘭は小綺麗な洋風の建物に足を踏み入れた。

すると、黒を基調とした白いレースのフリルが配われたドレスに、同じく白いエプロンを着けた二十歳そこそこの少女に出迎えられた。

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

そう言われてやに下がったジンを見て、蘭が目を見開いた。

◇　五卓　地獄の釜口が開く（後書き）

一体ジンて＾＾；　タクシー料金を踏み倒す悪辣さは流石ですが、そのまま着いてゆく蘭も蘭です（「▽」；）

そして二人がたどり着いた場所とは？　それは神夜先生に委ねましょう＾＾

でも解りますよね？　あんな出迎え方をされたんですから……。

では神夜先生、お願いします＾＾

◆ 六卓　パレ・ロワイヤル

扉を開けた途端、空間がねじ曲がって見えた。

一歩踏み出す前に開かれた視界を見て、蘭は目を疑った。慇懃に礼をされた無表情なメイドに目礼をしたジンは、先へ進んでいく。自分の分しかしない足音に気付き、ジンは立ち止まった。

「どうした？　怖じけづいたか？　乗り気じゃねぇなら帰ってもいいぞ？」

全てお見通しのような口ぶりで、振り返ったジンは固まる蘭へ低く投げ掛ける。

「そんなことはありません！　行きましょう！」

「フン。強がりだけは一人前だな」

子供扱いをされ、むきになった蘭は慌ててドレスの裾を上げたが、その手が震えているのに気付いた。

身体は正直だった。ここには、見上げる者を圧倒する威圧感があった。そして容赦なく襲いかかってくる不安感も。

主に白を基調とした壮厳な蔓薔薇（アーチ）門状の曲線が等間隔に続いていき、奥行きをしっかりと支えている。植物の葉を見ているようだった。まるで生き物のように自由に育んでいく曲線を、複雑・優美に

装飾されていた。壁と天井の境界があいまいだったが、廊下であることだけは辛うじてわかった。

「歴史の教科書で見たことがあるわ。まるでベルばらの世界ね」

「ロココ建築ってやつさ。三百年前に流行った豪奢な室内装飾ってとこか？　それにしても、ここの空気はいつでも澄んでいやがるな」

重苦しい空気を吸いながら、途方もない気分になって蘭は呟いた。足が石床にくっついて動かない。少しでも馴染める雰囲気ではなかった。

「さあ、とっとと行くぞ。皆が待っている。現在に飢えた者達がな」

投げ掛けられた意味深い言葉へ、蘭の両口角が引き攣った。

「皆って……誰が？」

「来れば分かるさ。それともう一度聞く。帰るなら今だ。もう一枚扉を開けたら、もう引き返すことは出来ねぇ。それだけは言っておく」

高圧的に物言うジンに指差された蘭の背が凍りついた。そして自分自身から警告された。いくら小五郎の知り合いだからと言って、

この男を信用してはいけない――と。
だが愚かにも、好奇心旺盛な十代の少女には潜在意識さえ敵わなかった。引き際を知らぬ駆け引きと陳腐な意地もあった。

「行きます、私行きますから！」

耳をすっぽり隠すまで立てられた深黒のコートの奥から、ジンは薄ら嗤いをした。いつも以上に、嗤う意味があるように見えた。

「じゃあ早くしろ。早くしねぇと“夜を抜けきらねぇから”な」

再び規則正しい靴音が、豪華絢爛な回廊に高く響く。覚悟を決め、小さく頷いた蘭は、歩き慣れないながらも懸命に歩みを速めていった。

「あの子……！　どうしてこんなところになんかいるのよ？」

不規則に混ざり合った二つの靴音が、薄闇の中奥深くへ沈んでいくのを見送って、女は呟いた。無数にある柱の死角から偶然眺めたその光景に、開いた口の震えが止まらない。だが、どうにかしたい強い意志が意識をより鮮明にさせた。

「ジンはきっと、あの子を“迷わせる”つもりに違いないわ！　そして私のように」

それ以上の言葉は言えなかった。固く閉じてしまった口が全てを物語っている。たった今、目の前を通り過ぎた少女に、往年の自分とが被る。

振り返りたくもない過去を感情の奥へ封じ込め、これからだけを見て進んでいくことに決めた。だが、あの時あの男からの甘い誘いに、迂闊にも乗ってしまった。あの子のように。

薄い金髪の若い美女が、後悔や悲しみが渦巻いた身体を力任せに引き寄せた。

「とりあえず、毛利探偵事務所に向かってあのボーヤをここまで連れてくるしかないわね。それから打つ手を考えましょう」

柔らかそうなウエーブの髪をふわりと翻し、女はもつれそうなくらいに足を急かせた。

◆　六卓　パレ・ロワイヤル　（後書き）

パレ・ロワイヤルとは、ルーブル宮殿の北隣にある歴史的建造物です。昔、パリに行った時そこらへんに行きましたが、全てが新鮮で、いつの間にか１０ｋｍくらい歩いていましたね。パリの凱旋門付近には土産物屋が犇めき合っています。機会があればまた……いや、一度行ったからもういいかな、パリは。

がむしゃらに進んで行く姿勢は新一譲り？　ですか。ラストに登場した謎の女の正体は、もう誰だか分かりますよね？　扉の向こうには、彼女が後悔したことの答えが隠されています。

ロココ調の雰囲気が少しでも伝われば幸いです。シリアス調の後には、大ドンデン……アリですよ＾＾

◇　七卓　迷える子羊の夕べ

思うように進まない足元を顧みて思った。何故ここまで頑なに自分の意思を拒むのかと。吐いて出る重い息が尚更に表情を曇らせる。やり場の無い動揺から、ベルモットはつい愚痴を溢した。

「ぼうやの所に行ったところで何になるっていうのよ。私があの子の緊急を知らせる事に何の意味があるって言うの――？」

大体、話自体に信憑性の欠片も感じられないと思う。自分達の身を追うコナンにどう言い繕ったら良いのかさえ解らない。美麗なウェーヴを掻きあげ、ベルモットは薄く唇を結んだ。

そして、これ以上迷っても無駄だと考えて重厚な玄関扉を押し開けた。自分に眩しすぎるほどの光を与えてくれた蘭への思いだけで――。

ベルモットが屋外で涼やかな微風に口元を和らげていた頃、蘭はジンの数歩後ろで躊躇っていた。「行きます」と言ったのは誰でもない蘭自身だったのに、上から見下ろす視線を感じて再度不安を抱いてしまった。

気を抜けばたちまち飲み込まれてしまいそうで身体の震えが止まらない。けれど大見得を切った以上、後に退けない意地もある。

そんな蘭に気付いたジンが、最後通告だと言いたげに口端を歪めて低く投げ掛けた。

「なんだ、やはりさっきの威勢はハッタリなのか？　仕方ねえ、今日の処は帰るんだな。元々お前のような小娘には、俺のパートナーは務まらねーようだ」

ジンに薄笑いでからかわれ、蘭の眉根が吊上がった。沸々と怒りが込み上げてきて、我を忘れて扉に突進してゆく。

ジンは、そんな蘭を見て一瞬驚き、低く頷いた。

「上等だ。これでお前も俺のコレクションの仲間入りだな。何て呼ばせようか楽しみで仕方ねえ」

それを聞いた蘭の足が不意に止まった。蘭の奥底の意識がそうさせた。蘭としては実に誤算だった。ジンの言葉を待つべきだった。

しかし気付いた時には遅過ぎた。既に開け放たれた扉の把手を握る手を震わせ、蘭はゆるりとジンを振り返って当惑の声を漏らした。

「コレクション？　なんですか、それ？　言ってる事の意味が解らないんですけど？」

「そのままの意味だ。今日からお前は俺のコレクションとしてここで働くんだ。なあに、直ぐに慣れるさ」

「そんな事を聞いてるんじゃありません！　何でわたしがジンさんのモノにならなくちゃいけないんですか？」

蘭が声を荒げても、ジンは一向に堪えないどころか怪訝そうに蘭を目線で威圧してくる。蘭はこの時になって初めて深く後悔した。

さっき聞かれた時点で、いや、不安を覚えた時点で引き返していれば、と。そして、小五郎の知り合いだからといって信用しきってはいけなかったのだと。

「だから聞いただろうが。引き返す事は出来ないが構わねえか、とな。お前は自分から逃げ出す機会を放棄したんだ。温和(おとな)しく観念した方が身の為だぞ？　出来れば手荒なまねはしたくねーからな」

表情を本(もと)の冷酷冷徹に戻したジンが、容赦せずに畳み込める。言葉端には巧みに紳士を謳(うた)ってはいるが、その奥底は計り知れない。温度差の烈しい言葉に、蘭の顔が強く引き攣ったまま少しも動かなくなった。

ジンが勝ち誇ったように賤しく口端を攣らせて冷徹に笑うと、蘭はその場にへたり込んで総大理石の床を弱く睨み、奥歯を噛み締めた。己の浅はかさに嫌気が注して、込み上げる涙を止める事が出来なかった。

ジンが、意に介さないといった顔で更に追い討ちを掛ける。

「取り敢えずこいつに着替えてもらおーか。お前にはそのドレス以上に似合うだろーぜ。詳しい話はその後にでもしてやるさ。とにかく、早く俺の病み疲れた心を癒してくれ」

半ば強引に手渡され、その衣装を見た蘭の瞳が煌めきを失くした。当惑や困惑の域を超えた負の感情が湧き上がる。自分には似合う訳が無い。それよりも、どうしてこんな物を着なければならないのかと深く悩む。諦めと、無理に繕った達観の表情は哀しさを増してゆく。

渡されたゴスロリ系のメイド服を弱々しく見つめ、蘭は小さく嘆息を吐いた。何故自分がメイドカフェでジンを癒す為に働かなければならないのか、と。

漆黒のメイド服を抱え込んだ蘭は、それを身に纏う自分の姿を想像して肩を沈めた。

ベルモットは、毛利探偵事務所への道を只管急いだ。蘭の身に迫った危険を思うと、運ぶ足にも力が籠もった。一秒でも早くコナンに事情を説明して、銀髪の悪魔の魔の手から救い出して欲しいと思ったからだ。

今の身なりの事なんか気にしてはいられなかったし、そんな気持ちのゆとりは一切無かった。それぐらいに蘭が大事な訳で、彼女の為だったら生き恥を晒す事にも充分堪えられた。

そんなベルモットがタクシーを降りて事務所への階段を息も絶え絶えに駆け上がると、鉢合わせになったコナンが驚きでその場に固まった。

◇　七卓　迷える子羊の夕べ（後書き）

蘭が手渡されたゴスロリのメイド服、蘭自身は似合わないと決め付けてしまっていますが…実際の所はどうなんでしょう？　というか、タイトルにそぐわない展開となっておりますが、都度方向修正していく次第です。

シリアス調の文体も、なるべく取り入り易いものに変えていきたいと思っています。大きなシリアスの後のどんでん返しをご期待くださいませ＞＜。

ところで、ベルモットが蘭達を見送った（前話より…）とすれば、彼女も同じように漆黒の衣装を身に纏って探偵事務所を訪れた筈。コナンの動きが止まった事からもそれが想像出来ますよね？　ベルモットの過去…私的には興味津々なのですが＾＾；

共同執筆者としても、わくわくドキドキを止められません＾＾；本当に、どうなっていくのでしょうか？　ムチャ振りをした私からこんな事を言ってすみません＞＜。

◆　八卓　館の裏側

ジンに無理矢理腕を引かれた蘭は、足をもつれそうになりながらも奥の扉まで着いた。
ラッパを吹きながら虚空を仰ぐ天使達が彫られた白い扉を、蘭は何となしに見上げた。彫りの深い天使達の顔は険しかった。まるで辿り着いた者を引き止めているように見えた。蘭の思惑通り、これは警告だった。

「さぁ、いくぞ。なぁに……悪いようにはしねぇさ」

レースで膨れた黒ドレスを抱え続ける手の感覚がなくなっていた。どこまでも青ざめていく蘭を見て見ぬふりをしたジンは、重厚な扉に手を掛けた。

「無間（むげん）世界へようこそ、毛利蘭嬢」

元々低かったジンの声が更にどすがきいて低まり、頭中に響く。蘭の背筋が震えた。
物々しく開かれていく扉の向こうの世界を、蘭はドレスの裾を引っ張り顔を隠した。だが耳だけは冴えていき、遠くから優雅な三拍子の音楽が聞こえてくる。
不透明に響き渡るジンの言葉の真意を考える余裕など、今の蘭にはなかった。

無間世界、それは最も過酷な地獄を言う。一度入ったらもう最後の、虚の地獄。

新しい視界を入れた瞬間、蘭は大きくよろけた。荒波が引くように身体から力が抜け、笑顔で二人を迎える若い女に目を見開き続けた。

「お帰りなさいませ、ジン様。お待ちしておりました」

何度まばたきをし、その度に目をこすっても、よく見知った喫茶店のウエイトレスがここにいた。

主人持ち前の切れ長の双眸でわずかに目礼をされ、麗女の相貌はほころぶ。黒いメイド服の裾を楽しそうに持ち上げたロングヘアの女は、呆気にとられた蘭を敵対視するかのように目尻をつり上げた。

「あ、貴女は……」

「あぁーら、蘭ちゃんじゃない！　貴女もここに呼ばれたのね、私と同じように！」

「呼ばれたって……どこに？」

「なぁーにとぼけてるのよ！　奥の間でボスが待ってるから。さあ、早く急いで急いで！」

「ボ、ボス？」

若い麗女との意味不明の会話に頭痛がしてきた。咄嗟にジンへ解釈を求めても、思った通り相手にされない。震え出す声の調子が外れた蘭は、驚嘆を込めてあちこち見渡した。

「すっごい豪華！　きれい……！」

予想通りの壮厳な大広間だった。自分達の靴音だけが高く響き、高貴に奏でられていく。赤いベロア布を張られた横長の足長ソファーが幾重にも並べられ、中世フランスのサロンとすっぽり被る。精巧な細工を丹念に重ねたシャンデリアの大行列が延々と続いていく。そして耳をかすかによぎるメヌエット調の冥想音楽など、挙げればきりがない。

目を全開させるのも辛かった。この館の主の財の深さを考えただけでも、眩暈が止まらなかった。

「どうしたの？　黙っちゃって。でも無理ないわよねえ？　お伽話の世界にだって出てこない豪華さだしね？」

青臭い顔つきを見せとろんとしている蘭に、女は皮肉を込めて囁

く。未だ夢見心地になっている蘭を、ジンは立ち止まって物見遊山のように遠目で眺めていた。

「す、すみません。びっくりしちゃって。それよりここはどこなんですか？」

壮大艶麗なサロンに自分達以外誰もいないことに疑念を抱きながら、蘭は寸分の狂いもない挙措端正な様を見せる美女を見上げた。

「梓さん？　変な質問しちゃってすみません。教えてください、お願いします」

「え？　本当に知らないでここに来たの？　ここはねぇ」

毛利探偵事務所の下にある喫茶店・ポアロのウエイトレスである榎本梓に、蘭は深々とお願いしますの意味を込めて敬礼をとってみせた。

大広間の天井が、一際高く抜けた固い響きを迎える。変な仰々しさが陳腐に映り、梓は目を寄らせて含み笑いをした。

「ここは、青山剛昌様の私邸の一つよ。さぁ！　さっきも言ったけど、奥の間で剛昌様が待っていらっしゃるから、急いでね」

とんでもない答えを貰い、蘭の頭は真っ白になった。

◆　八卓　館の裏側　（後書き）

まさかこんな展開になるとは！　いきなり梓が登場？　まぁ、いっか……という感じでしょうか。暁先生、お願いですから必死に考えた展開なんで、次回で掘り下げて下さいね。

◇　九卓　風雲急な誘い文句

「――青山剛昌先生の私邸って…何で私がそんな所へ？」

青山の私邸に連れられたと知った蘭は、まばたきの速度を更に速めた。心の奥底を見透かすような梓の目線も受け止められずにいた。

ジンにデートに誘われて夢心地だったのに、着いた先ではメイド服に着替えるように急かされた。それだけでパニック寸前なのに、今自分が居る場所はどうだ。飛ぶ鳥を落とす勢いで破竹の快進撃を続ける青山氏の懐に招き入れられたとは、すぐには理解し切れない。いや、言葉では理解出来たが、頭が冷静に受け止めなかった。

立ち眩みを起こしてしまいそうなふうわりとした感覚に襲われた蘭は、死力を絞ってジンに身体を向け、攣りかけた口端を抉じ開けた。

「一体…何が本当の事で、何が起こっているのか解りません……！ちゃんと解るように説明してください」

「一度だけ説明してやろう。我等がボス『青山剛昌様』がお前を所望したんだ。理由は自分から伝えるから、とな。ボスの口ぶりでは、お前の事を随分気に入っているらしい。くれぐれも失礼のないようにしろよ？」

「そ、そんな……！　だってわたし、青山先生とは一度も会った事が無いんですよ？　なのに何で――？」

茫然とする蘭を気に留めず、ジンは「着いて来い」とあごで杓って一人で歩き出した。蘭が呼ばれた理由に興味深げな微笑を浮かべた梓が、ジンの背中を目線で追って蘭に振り向く。
梓は、ジンに着いていこうとしない蘭に呆れ顔で肩をすくめた。

「ほら、蘭ちゃん！　早く行かないとジン様がむくれるわよ？　ああ見えて結構ナイーブなんだから！」

「でも、わたし――」

急かされても正直乗り気にはなれなかった。はっきりと会いたい理由を教えてくれない苛立ちもある。
蘭は、自分を置いて進んでいく状況を、どんよりと重い気持ちで考えた。青山剛昌といえば雲の上の存在だ。本音を言えば会ってみたい。こんな形でなかったら、喜んで跳ね回っただろう。
けれど、今回のような意表をつかれた会い方は好みではない。多くのファンを差し置いて、抜け駆けみたいな事はしたくなかった。それに、なんとなくだが罠に嵌められたのではないかとも思った。
実は青山剛昌というのはハッタリで、自分をその気にさせる為の嘘ではないかと。

「ありえないよ、こんなのって…」

声に出して呟いた事で、気持ちは沈む。わたしはどこに向かうんだろう…と、まるで出口の無い迷路に迷い込んでしまったみたいに

深く重い息をついた。
顔色を蒼くして足に根が生えたように動けずにいる蘭を見た梓が、心配して声を掛けた。

「情けないわねぇ。いつも小五郎さんに恐れられてる威勢はどこに行ったの？　ジン様も悪いようにしないって言ってたじゃない。観念しなさい」

梓は背中をポンと叩き、蘭の前を歩き始めた。蘭が途中で逃げ出さないように自分の右手で蘭の左手首を強めに掴んで歩を進めてゆく。
引き摺られる事でしか前に進めない蘭は、自分がいやに情けない人間に感じた。そして文字通り「この場から消えてしまいたい」と心の中でぼやいた。
その時、廊下の先からジンの鋭い声が響いてきた。

「何してやがる！　お前を連れてかねーと、俺の出番が無くなっちまうだろうが！　ボスは本当に怖い方なんだからな？　本気で怒ったら、この世界なんぞ簡単に消し飛んじまうぞ」

「ほらっ、蘭ちゃん！　ジン様が呼んでるわよ？　急いで急いで！」

「あ…梓さん、痛いよ……！　分かったからもう少しゆっくり歩いてください」

手首の痛みが麻痺した思考回路を呼び覚ました。そして蘭は不思

議な事を考えた。誰かの手の平で踊らされているような、地に足の着かないようなふわふわとしたした感覚が蘭の身体を包み込んで離さない。
次第に視界が靄が掛かったみたいに霞み始め、天井高くからぼやけた声が聞こえてきた。

《ようこそ毛利蘭さん。わたしは青山剛昌というしがない漫画家です。この度はわざわざご足労でした。どうしてもあなたに会って聞きたい事があってね》

ぼやけていながらもよく通ったその声に、蘭は目線を走らせたが頭上を見上げても主は見えなかった。そして不意に思う。これは幻聴か何かで、未だ自分は意識を保っていないのでは、と。
しかし、蘭にはその声に聞き覚えがあった。以前テレビのトーク番組に出演していた時に聞いた声と、今降ってきたものが耳の奥で重なった。
現実味を増した青山氏との接見を前に、蘭の瞳が煌いた。さっきまでの疑いの気持ちはどこかに消えてしまっていた。
憧れの剛昌先生と会える。それだけで蘭の心は晴れ渡った。そんな蘭の思いを、続く言葉が制した。

《コナン君の正体を疑っていますね？　そう、彼が工藤新一君ではないかと――。その事の確認がしたかったんですよ。そして、あなたとコナン君とわたしの三人で食事をしたいのですが、どうでしょう？》

いきなりの提案に、蘭は意味が解らず呆然と天井を見つめ続けた。

◇　九卓　風雲急な誘い文句（後書き）

青山先生の「食事への誘い」にびっくりした蘭。彼女に投げられた質問の真意は何処にあるのでしょうか？
蘭が足を踏み入れてしまった「無間地獄」の全貌が少し見えてきました。結末に待っているものは一体――？

◆　十卓　短気は損気

鉢合わせした美女の金髪は、本来の輝きを失っていた。髪の乱れもよく目立つ。
突然の来訪者に、コナンは言葉を失った。

「ついてきなさい」

抑揚のない、低い囁きが戦慄を呼ぶ。
何か恐ろしいものを見た直後のような青ざめた横顔が、ただ佇んでいるコナンへ振り返る。それが、最後に見たベルモットの顔だった。
聞かずとも分かった。ベルモットが動く理由、それは蘭の異変を指していた。
ネオンが賑わう長い暗夜街路を、二人を乗せたタクシーが猛迅と抜けていく。
車窓の風景を虚ろに捉えているベルモットの背中が、コナンの目に痛ましく映った。

全て自分の意志で来たのだ。逃げ出すことは許されない。
ベルモットの背に食らいつきながら、コナンは進んだ。

タクシーを降りてから、けったいな格好をした侍女に出迎えられた。そして豪奢な大回廊を通り抜けたが、あまり気にとまらなかった。それだけ混乱していたのだ。
高貴な調べを奏でていた不揃いの靴音が、大扉の前で止まった。

「さぁ……開けるわよ」

決意を込めた美女の喉鳴りが、コナンの耳を打った。心なしか胸も締め付けられていく。
シャンデリアで着飾られた壮厳な天井が、遥か上方から眺めている。途方もない雰囲気に、コナンは気負いごと飲まれた。

「は？」

コナンは絶句した。この世の果てを見たようだった。
二枚扉の向こうから開かれた光景に、首筋の力が抜けたコナンは膝から大理石の床へぺたんと落ちた。
まず目についたのは、奥行きが深い長テーブルだった。上品な白布がびっちり被せられ、華奢な燭台が等間隔に並んでいた。

「コナンくーん！　遅かったじゃない！　待ちくたびれちゃったよ

っ！」

「フン。もたもたしやがって」

「あぁらコナン君！　最近ポアロに来てくれないから、マスターが寂しがってたわよ？」

地獄絵図だった。隙間なく飛んでくる三つの声色の組み合わせは、通常ではありえない。未だに蘭とジンが同一の視界に入るのさえも、戸惑ってしまうと言うのに。

「これは一体……？　なぁベルモット――い、いねぇぞ？」

咄嗟に解釈を求め真横を向いたコナンだったが、ベルモットは消えていた。どこへ行った、と見渡したらすぐに見つかった。ジンの右隣りへ座り、優雅に煙草を吸っていたのだ。

「ベルモット……オメーぇぇ」

意識を束ねてジンに寄り添う美しい女は、飄々とした様子で足を組み直していた。その姿に怒りを感じ、コナンは何重にも睨み上げた。

「私だって驚いたのよ？　ジンったら、あらかじめひとことくらい

言ってくれればよかったのに。どっきりなんて時代遅れよぉ？」
「すまねぇな。突然の命令だったんだ。何せ剛昌様の命令には迅速に対処しねぇとな」
「ゴーショー？　誰だよそれ？」
「違うわよコナン君！　ゴーショーって語尾が上がるんじゃなくて剛昌様。イントネーション下げて、柔らかく、包み込むように言うのよ」

怪訝に思ったコナンは今一度辺りを見回した。
奇妙に彩られた視界には、長テーブルを挟んで向かって右側には手前からベルモット、ジン。そして左側には同じく手前から梓、蘭。蘭の向かい側は空席で、あそこが自分の席だと言うことは確認するまでもなかった。

「わーったよ。座りゃいーんだろ座れば」

自分に刺さる視線と沈黙が訴えてきているようで、コナンは舌打ちをしながら空席に着いた。
従ったことを確認した一同は、再び賑わいを響かせた。

「それよりさ、どーしても聞きてぇことがあるんだけどよ？」
「なぁにコナン君？　この中で一番聞き上手なこの私、梓が聞いて

あげるわよ？」

「梓さん、聞き上手の意味間違ってねぇか？」

しゃしゃり出た梓に、コナンは溜め息を混ぜながら肘を付く。
二十歳くらいの、落ち着いた声音だ。今更小学生の口調をする気にもなれなかった。

「じゃあ遠慮なく聞くけどよ――」

限界まで声音を低め、コナンは激情を抑えながら怒りの対象を指し示した。扉と向かい合わせの位置にある、社長席へ見開いた目を突き出した。

「これがゴーショーって言うのかよ！　ふざけんじゃね――！」

コナンの剣幕に、燭台の炎が一気に噴き出した。
怒りに任せて長テーブルを叩き上げた少年の不可解な行動が理解出来ぬまま、梓は首を傾ける。そして長テーブルに身を乗り出して答えた。

「？　どっから見ても剛昌様じゃない？　コナン君何言ってるの？」

◆　十卓　短気は損気（後書き）

ここで区切りました！　ハイ、ここで……です☆
実は、コナンが何を見てキレたのかは、神夜の頭ん中にあったんです。でも、ここで区切っちゃいました。えへへ（＊^．^＊）
リレー小説はインスピレーションみたいなものですね（「▽｜；）
すみません暁先生……！　決していじめなどではありません！
さてさてどう出る暁先生！　ありきたりなのは駄目ですよ（鬼！）
☆☆　睡眠時間は削らずにお願いしますってお前が言うなぁっ！

◇十一卓　倒錯の世界へようこそ

「これがゴーショーだって？　どっから見たってオ――、いや…工藤新一じゃねーか！　おい蘭！　まさかオメーまで……って、ら…ん？」

言い捨て切れなかったコナンの言葉尻が妙にすぼまったのは、問い掛けた蘭の様子がおかしかったからだ。
微妙に焦点の定まらないトロンとした瞳で、蘭は剛昌に見入っていた。
蘭の異変に気付いたコナンの頭に言い知れぬ不安が過ぎる。

「オメーら、もしかして蘭を洗脳したのか？　梓さんもグルって事なのかよ？　一体何の為にこんな事すんだ！」

「あぁら！　わたし達は何もしてないわよ？　でもそう言われてみると、剛昌様の声を聞いてから少しおかしかったかも」

咄嗟に梓が弁解したが、鞘から抜かれた怒りの矛先は収める場所を失っていた。
コナンは、奥行きの深いテーブルを一巡りさせた鋭い目線を剛昌に戻して鋭く睨み重ねた。

「な……！」

上座を強く見据えたままの状態で、コナンは続く言葉を飲み込んだ。
豪奢な椅子から飛び付くように身を乗り出して、そのまま凍り付いた。

「あら、その様子だと今見えている剛昌様がホログラフィだって事に気付いたみたいねぇ？」

「フン。流石に子供だましは通用しねーって事だ。剛昌様も詰めが甘かったってとこだな」

固まったままのコナンを横目にベルモットが微笑を漏らし、ジンは低く押し殺した声で呟いた。
耳の端に捉らえたコナンはスローモーションで二人に首を返した。

「どういう事だ？　こんな小細工しやがって。まさかこれも、どっきりとやらの伏線とか言わねーよなァ？」

「だとしたらどう出るつもりだ？　怒りに任せて帰っても構わねえが、後々お前の立場が悪くなるだけだ」

「はぁ？　言ってる意味が解んねんだけどよぉ。そもそもこの集まり方は何なんだ？　いい加減真意を教えてくんねーか？」

婉曲したジンの文句では埒が明かないと考えたコナンは、ストレートな問いをぶつけた。
不可解な事が多すぎる澱んだ空間から一秒でも早く抜け出したかったからだ。
コナンが再度同じ質問を重ねようと口を開きかけた刹那、ホログラフィの口許が動いた。

《それはわたしから説明しよう。先ず、悪かったね？　手の込んだ事をしてしまって。梓さんの言う通り、蘭さんにはわたしが暗示を掛けたんだよ。そして梓さん自身にもね》

少しくぐもった声だったが意外に通って聞き取りやすかった。
よく見ると肉感ばかりか口の動きも一言一句正確に再現されていた。
思わずその精巧さに驚嘆したコナンは、いつの間にか剛昌の声に聞き入っていた。

「あ、いや。オレも強く言い過ぎたみてーだから。でも何で……？
納得のいかねー事ばかりじゃねーかよ」

《うん。その事なんだけど、食事をしながら話さないか？　どうしてここにキミを呼んだのか。それからキミ達の今後についてだ》

「オレらの…今後？　それって一体……？」

どこか含みのある剛昌の言葉を、何故だかコナンは素直に聞き入れたい気になった。
穏やかな語り口調が怒りを鎮めてくれた事も一つの理由だったが、何より欲した答えが目の前に提示される事が有無を言わせなかった。
となると現金なもので、コナンは今までが嘘みたいに晴れやかな笑顔を見せ付けた。当然作り笑顔であったのだが。

「うん！　判ったよ、ゴーショーのおじちゃん！　生意気な事言ってごめんなさい」

あからさまに至純な子供を演じるコナンに、剛昌は乾いた苦笑いで応えた。
そしてパチンと指を鳴らし、蘭と梓の暗示を解いた。
夢から覚めたようにまばたきを繰り返す蘭と梓を涼やかに一瞥して、剛昌が繋げる。

《それでこそ江戸川コナンだよ。まあ手前みそかも――おおっと…核心は食事しながらだったね！　じゃあ早速頼むよ、梓さん。そうそう！　メインディッシュは『アレ』にしてくれないか？　……来てるんだろ、彼女？》

「あ、アレ……ですかァ？　……かしこまりましたァ…」

『アレ』と聞いた梓が悲壮な面持ちでサロンを出てゆくと、ジンの目が異様に煌めき始めた。

「剛昌様、今日はあの絶品を頂けるのですか？　アレは良いですね。至高の料理ってヤツですか」

《そうだね。わたしも久し振りに食べたくなったんだよ。一度食べたら病み付きになるからねぇ、アレは――》

早い夕飯がろくに喉を通らなかったコナンは、二人の会話の内容に零れ落ちそうなよだれを啜った。

絶品と言うからにはそれ相当の豪華な料理に違いない、と内心ほくそ笑んだ。

期待に胸を膨らませたコナンは、サロンの扉が開くのを今や遅しと待った。

そして半刻後、恭しく開け放たれた扉に向けた蒼眼に『彼女』が飛び込んできて、コナンは深く息を呑み込んだ。

◇十一卓　倒錯の世界へようこそ（後書き）

剛昌様が言う『アレ』とはどんな料理の事なのでしょう＾＾
梓の凹みようから、とてつもないモノを想像出来ますね＾＾
『彼女』が誰なのか解れば必然的に答えは出ます！

それにしても……。『アレ』を絶品と称賛するジンや、病み付きになるとまで宣う剛昌様の味覚って…＞＜。

変な切り方してすみません！　神夜先生……後はお願いしますm（＿＿）m

◆十二卓　愚か者の自滅

「何で貴方がこんなところにいるのよ？」

「は、灰原ァ！？」

開かれた扉の入り口に立っていたのは、いつも愛想のない、不機嫌な言い方をするあの少女だった。

すぐさまコナンは、長テーブルに座っている銀髪の男に目線を走らせた。

現実を見ても信じられなかった。少女は、すぐそこにいる冷酷な男をこの世の何よりも恐れているはずだ。以前接近しただけでも、確かにおびえていた。それなのに、同じ部屋の空気を普通に吸っているのだ。

「お久しぶりです、剛昌様。突然のお呼び出しに驚いてしまいました」

《すまないね。研究が忙しいのに》

「いえ、そんな！　研究なんて、いつでも出来ますからお気になさらずに」

哀が長テーブル中央まで来て、恭謹に拝礼している。まばたきばかりしていたからか、気付くのが遅かった。

一難去らずにまた一難。謎ばかりが頭にへばりつき、苛立ったコ

ナンはいきなり叫んだ。

「は、灰原！　何でいきなりオメーが登場してくんだよ？　そ、それにここにはジンがい」

「この場は治外法権だから」

「はぁ？」

「ここは剛昌様のお力で、私の身の上は保障されているの。何その間抜けな顔？　フフフ、傑作ね」

人の心配なんかどこ吹く風で、鼻笑いをしながら口角を引き上げる哀に、コナンは錯乱した。だがすぐに現状を理解し、ふつふつと怒りが沸いてきた。ギリッと哀を睨みつけてから、振り返る。コナンは食卓を囲んでいる面々を一通り眺めた。

「どいつもこいつもどいつもどいつも……」

「ここは日本だ。ドイツなんかじゃねぇ。愚か者が」

ジンから出たまさかの突っ込みに、コナンの勘忍袋は粉砕した。今までの我慢が、水の泡になろうがどうでもいいと思った。

だから実行に移した。飢えた獣のように、まず荒々しく叫んだ。

「――いい加減にしろよオメーら！　も、ももう限界だ！　このやろぅぅぅ……！」

怒りで目が血走ったコナンは、感情のままに動いた。神聖な長テーブルの上に土足で乗っかり、目につく燭台を全て蹴倒していた。

「うらららあああぁぁぁあぁぁ――！」

悲鳴などは聞こえなかった。ただ皿が割れる鋭い音や、柔らかい物が床へ落ちた鈍い音が立て続けに起こった。

梓が運んできた前菜もその中に含まれていた。一般人が一生に一度食べられれば儲けものの、超高級珍料理まで。

気がつくと、あたりは大地震が起こったような惨状になっていた。チンパンジーのように前かがみで長テーブルの中央に立っていたコナンは、やっと我に返った。自分の荒れた息の音で、理性を取り戻したのだ。

「あ、あれ？　オレ、一体……？」

とぼけたように目を見開くコナンに、一同から冷ややかな視線が集まった。

誰も口を開かない。だが、怒りを通り越しているのは分かった。

自分が暴れ狂った痕跡を見回して、コナンは後悔で震え出した。

「あ、あのです」

ね、と言い終えないうちに、逆鱗が降り立った。あまりの凄まじさに、空気が凍りついた。

皆も動揺が飛び出てしまい、おののきながら一斉に中央の席へ注目した。

《ここまでやるとはいい度胸だね。江戸川コナンよ、お礼に最もふさわしい“罰”を与えよう》

「あわ、あわわわわ……」

声自体は悠長に流れているが、明らかに凄んでいた。

コナンはどうすることもできずに、ただおびえているだけだった。

◆十二卓　愚か者の自滅（後書き）

コナン、ついにブチ切れしましたね～；　おそらく、ジンの『愚か者』発言が直接の原因かと。哀ならいいそうだけど、まさかジンにそんなこと言われるなんて～ってのがあったんでしょう。

さて……どんな罰が待ってるんでしょうねぇ……><

◇最終卓　行き着いた先は無間地獄

《江戸川コナン。キミには主役から降板してもらおう。とても器ではないよ》

固まったままのコナンを更に痛め付けるような剛昌の声が高らかに、そして轟々と響き渡った。

その禍々しい声に戦々恐々とする者、憐れむ者、それぞれの思いを込めた目線がコナンに集まった。

その内の一人である蘭が、何を思ったかのか急に片付けを始めた。

「ら…ん？　オメー、オレが大変な時だってえのに……片付けかよ？」

立場的に危機が迫っている時にそんなツッコミを入れたコナンに、蘭は冷たい視線を嫌というほどぶつけた。

「誰のせいで片付けなきゃならないのか分かってるの？　コナン君が……ううん！　新一がこんなに散らかしたんじゃない！」

「へ？　新一って？　蘭ねえちゃん、まだボクを疑って――？」

「もう結構！　さんざんっぱらタメ口利いといて、今更子供の真似しないでよ！　もうアッタマきちゃうったらないからね？」

床に散乱した無数の皿や料理だった物の残骸を集める手を休め、蘭はコナンのすぐ目の前で両腰に手を遣って仁王立ちした。
怖々と見上げるコナンは、極限まで吊り上がった蘭の眉が少しでも下がらないものかと、唾を飲んで見上げたがそれは叶わなかった。

「当然の報いね。蘭さんの回し蹴りが飛ばないだけまだマシじゃない？」

「なんだ、やらねえのか？　空飛ぶ名探偵ってのを見てみたかったんだがな。まあ本編で俺がやっても良いがな」

「あら、面白そうね。サブタイトルは『コナンの宇宙遊泳』って処かしら？　剛昌様なら本当にやりそうね」

少し場の空気が落ち着いて、勝手な事ばかり言い遣る面々に、コナンはギリッと奥歯を噛んで情けない顔で睨み上げた。

《おやおや、まだ解ってないみたいだねぇ？　ではもっと苦しんでもらうとしよう》

剛昌がそう言って指をパチンと鳴らすと、丁度コナンの足元の床がゴウンと鈍重な唸りを起てて口を開けた。
そして一瞬の事だった。コナンはものの見事に、真っ逆さまに漆黒の闇に飲み込まれてしまった。

「うあああぁぁァァ――――――――――――ッッ！」

コナンは、断末魔を思わせる叫び声をあげて上半身を跳ね上げた。そして何の痛みも感じない身体をまさぐった。

それから目線を巡らせ目を真ん丸に見開いた。

「……へ？」

間の抜けた声をあげたコナンは一旦瞼を固く閉じて暫く考え込んだが、あいにく答えは薮の中だった。

「何だったんだアレは？　もしかして、こんなとこでうたた寝してたからか？」

バクバクしていた動悸が治まったコナンは、小五郎の指定席から飛び降りて一つ大きな欠伸をした。

そして甚だ身勝手な事を考えた。おっちゃんの疫病神があんなへんちくりんな夢を見せたのだと。

「ヘッ！　大体あんなのありえねーしな。剛昌様とかってマジうさんくせーし！　忘れるに限るぜ」

コナンはそう結論づけたが、実は剛昌の真意を全く解っていなかった。

そして勝手に気を取り直して事務所のドアを開けると、夕飯の買い出しから戻った蘭と出くわした。

「蘭ねえちゃん、お帰りなさい。ボクお腹空いちゃった！　今日の晩御飯なぁに？」

「ん？　今日はねぇ、新い……コナン君が好きな『アレ』よ？　もうすぐ作りに来てくれるって！」

「アレ？　ていうか蘭ねえちゃん、今ボクの事を新一って言いそうにならなかった？」

「え？　気のせいだよ。変なコナン君。……あ、来たみたいね」

ふとした蘭の言動に耳をやれば確かに気付いた筈だったが、コナンはそれを怠ってしまった事にも気付かなかった。

階下から賑やかな声に耳を澄ませばその声は三通り。一人は毎日飽きるほど聞いている小五郎の物だと直ぐに解った。

そしてもう一人は女性の声で、これも直ぐに英理の物だと解った。

「へえ、珍しいんじゃねーか？　蘭のお母さんがここに来るなんてよ。しっかし、あと一人は誰なんだ？　どっかで聞いた事あるような気がすっけど……」

その疑問は小五郎が招き入れる声で解消された。先に英理が事務所に入って来た処で軽く挨拶をしたコナンの耳に、信じられない名前が飛び込んできた。

「さあさあウォッカさん！　せまっくるしい処ですが、まあ入って下さいよ！　おい蘭！　この人はなァ、オレの競馬の――――」

立ちくらみを起こしたコナンは、そのままその場にへたり込んだ。

そしてエンドレス――。丁度この時、遥か離れた豪奢なサロンでは剛昌達がほくそ笑んでいた事をコナンは知る由もなかった。

因みにその日の夕飯が英理特製のビーフシチューだった事は言うまでもない。

◇最終卓　行き着いた先は無間地獄（後書き）

何だかわたくし《暁》の力不足で駄駄駄作になってしまったこの作品……。《神夜》先生には大変申し訳ない次第です＞＜
一人で書くより数倍難しく、正直もっと早い段階で投げ出したくなりました（あわわ；　ごめんなさい神夜先生＞＜。）

でも、辛い反面面白かったので……勝手に満足感に浸ってます^^

読者の皆様に満足して戴けるような作品に出来なかった（と思います……）事が心残りですね。すみませんでしたm（__）m

次があればこの反省を生かせるようにしたいです。

最後まで読んで下さった方々には感謝感謝です＞＜。

２００７．０９．１２　暁　神夜《暁》

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5469c/

コナン氏の落ち着かない食卓

2010年10月11日05時37分発行